

新刊紹介

■渡邊義浩著『「三国志」の政治と思想 史実の英雄たち』

祢津 詩央里

本書は、後漢から西晋の時代、とりわけ三国時代について多数の著書・論文を発表している渡邊義浩氏によって書かれた一般書である。末尾にもあるように、本書は渡邊氏の代表作である『後漢国家の支配と儒教』『後漢における「儒教国家」の成立』『三国政権の構造と「名士」』及び『西晋「儒教国家」と貴族制』の内容をまとめ、黄布の乱から西晋滅亡までを叙述したものである。章構成は、第一章「黄巾の乱と群雄割拠」、第二章「曹操と荀彧」、第三章「文学の宣揚」、第四章「孫呉政権と揚州名士」、第五章「劉備と諸葛亮」、第六章「君主と文化」、第七章「死して後已む」、第八章「孫呉政権の崩壊」、第九章「魏晋革命と天下統一」、終章「中国史上における三国時代の位置」である。以下本書の内容を紹介する。

渡邊氏の挙げる名士とは、知識人の間に得た名声を自らの存立基盤とし価値基準を儒教に置いた、後漢末から三国時代の支配層である。彼らは国家に対して自立性を有し、郷里との関係を維持して豪族間の利害調整役にもなるため、地域支配の大きな鍵となった。魏・呉・蜀は、そのような名士と君主が「せめぎあい」ながら、君主権力確立と地域支配安定の両立を目指す。

魏の曹操は、殺された父の報復として徐州大虐殺を行ったため、支配下の兗州に動揺が広がってしまう。そこで新たな根拠地を名士の中心地であり臣下荀彧の故郷である豫州潁川郡に求めた。荀彧は多くの潁川郡出身名士を政権に参加させ、曹操に献帝を擁立させると、猛政（法刑を重視した統治手段）により「儒教国家」再建を目指す。しかし曹操は君主権力強化と曹魏建国を優先し、儒教に守られた「聖漢（春秋公羊学派が主張する、孔子によってその神聖さを保証された漢）」変革のため唯才主義を掲げた。荀彧は「儒教国家」再建が曹操のもとでは不可能だと悟ると、漢の擁護に転じて曹操と対立し自殺する。その後曹操は、文化的価値を占有する名士に対抗するため、新たな文化的価値と

なる「文学」を創出した。続く曹丕は、魏王位継承の際名士層から支持を受けていたため、彼らが求める「儒教国家」再建を目指し、宗室・外戚を偏重しない「公」の政治を展開する。明帝も「公」の政治を目指す。諸葛亮の死を契機に「私」的政策へと転換。明帝崩御後、名士の既得権を抑圧する曹爽に対して、司馬懿は名士の反発を束ね権力奪回のクーデターを起こすと曹魏の朝廷を制圧した。

父孫堅を継いだ呉の孫策は正統性として「漢室匡輔」を掲げ、これに賛同した名士周瑜が政権に加入する。孫策はさらに張紘・張昭等北来名士を優遇し政権安定化を図るが、過去に呉郡豪族の陸康一族を誅滅したため、江東名士との関係は悪化していった。続く孫権の時代には曹操の南下によって、降服派の北来名士・江東名士と主戦派の孫権・周瑜・魯肅が対立。曹操に勝利したことで孫権の君主権力は確立したが、周瑜・魯肅等が死去すると孫権は政権運営に腐心する。彼は後に公孫淵をめぐる政策で張昭と衝突すると、官僚の弾劾や二宮事件の名士弾圧等の強引な君主権力強化を進めた。孫権崩御後、諸葛恪は名士中心政権を確立しようと魏への侵攻を開始するが、君主との信頼関係維持や軍部掌握等の配慮を欠いたため殺害された。孫峻・孫綝政権は名士に対峙的な政策をとり短期間で崩壊、孫休は名士政権再建を図るが急死した。その後孫皓が君主権力強化の施策を行うと、反発した名士は勢力を軍部にまで及ぼす。存立基盤を失った孫皓は権力確立を目指し強引な政治を展開していった。

任侠的結合関係によって集団を形成していた蜀漢の劉備は、荊州に入ると名士を取り込むため劉表に失望する名士集団に働きかけた。一方その一員であり国家経営と救民を抱負に持つ諸葛亮も劉備に注目していた。そこで彼は名士集団を高く評価させるため劉備に三顧の礼を尽くさせる。また荊州統治と名士中心政権樹立のため、荊州名士を劉備集団に取り込み要職に配置した。一方劉備は益州攻略を開始し益州を手に入れると、その名士である法正を重用し諸葛亮の対抗勢力を作り上げる。しかし法正の死去により諸葛亮は名実ともに文武百官の頂点に立った。間もなくして劉備は諸葛亮の政治主導権掌握を防ぐため、彼に「君自ら取る可し」と告げ崩御する。全権力を掌握した諸葛亮は、益州統治確立のため益州出身者を政権の要職へと抜擢し、荊州名士社会に組み込んだ。また南征と益州経済発展の支援によって益州豪族との経済的競合を防ぐ。さら

に猛政を推進して政治的安定性を図ることで、益州出身者の支持を得ながら支配を固めた。後の北伐は、ほぼ敗走・撤退の結果ながら、外来征服者を益州に養ってもらうための正統性である国是「漢室復興」を遂行するため、また諸葛亮が名士として軍勢力を掌握するために続けられた。諸葛亮没後、後継の蔣琬・費禕が北伐を行わず政権存続を図ったことで、支配は安定するが政権の正統性は失われていった。一方姜維は、諸葛亮の北伐を継承して国是を遂行するとともに、自らの正統性保持と権力基盤の強化を図るが益州の経済力に配慮せず、故に益州・荊州出身者から批判が上がり、蜀漢名士社会は分裂、蜀は衰退していった。

魏の朝廷を制圧した名士司馬懿は、明帝との対峙を名士陳羣に担わせると陰で勢力を拡大。陳羣没後名士の中心となると軍事権や経済的基盤も掌握する。司馬師はさらなる権力拡大を目指した。司馬昭は皇帝曹髦の弑逆を儒教で正当化すると、五等爵制の施行によって貴族制を形成し、司馬氏の皇帝地位の絶対性を宣言した。続く司馬炎は、皇帝権力強化のため、国家権力強化を目指した貴族層の司馬攸擁立を封殺し不慧の司馬衷を立てた。嫡長子相続を示す『春秋公羊伝』によって司馬衷の後継が正当化される以上、貴族たちはそれに従わざるを得ず、これが八王の乱につながり西晋は滅亡する。

以上内容を紹介してきた。終章にもあるように、渡邊氏は中国貴族制を分析する方法論として、貴族の存立基盤を「文化」の専有に求める仮説を提示する。それを形成するものの一つが名士論であり、渡邊氏はその名士を通して三国時代を分析し、多くの論文を発表している。中でも蜀漢政権の構造に関しては、原籍や勢力等様々な分析によって研究が行われ、多数は劉備の益州獲得後に益州出身者の優越が見られると結論付ける。渡邊氏も同様の結論だが、その過程では名士論を用いたより具体的な分析方法が示されている。また劉備と諸葛亮の関係については、『三国志演義』等から信頼関係が非常に厚かったとされることが多く、先行研究も陳寿や裴松之の記述から同様に考えるものが多い。しかし渡邊氏は明の王夫之による『読通鑑論』三国の解釈に注目し、劉備と諸葛亮の間には対立関係があったという論を展開する。以上のように、渡邊氏は名士論によって新たな視点から三国時代を論じ、様々な説を展開している。本書ではその名士論を読者が比較的容易に理解できるよう配慮して論じられてい

る。また後漢時代の儒教や曹丕の『典論』等についても言及しており、本書は渡邊氏の近年に至るまでの研究を総覧できる著作とすることができるだろう。

一方で疑問を呈すべき部分もある。本書末尾には三国各政権の人的構成に関する表が附けられている。その蜀漢政権の表を見ると、宗預と廖化については「名声を有さない者」となっているが、第六章四項の本文においては両者とも「荊州名士」であるという矛盾が見られる。また渡邊氏が示す名士の定義については前述した通りであるが、本書内で名士とされる人物について『三国志』の記述を見ると、その定義には些か当てはまらないと考えられる人物もいる。例えば第七章四項で、樊建は荊州名士、張翼は益州名士となっている。樊建の名士たる根拠として、渡邊氏は蜀書の「武…与樊建齐名…（劉武という人物が樊建と並ぶ名声があった）」という記述を挙げている。しかしこの記述は樊建に評判が立っていたとは読み取れるものの、名声を「知識人の間に得た」とまでは言えないのではないか。また張翼を名士とする根拠の記事は『三国志』では見受けられない。渡邊氏は張翼が諸葛亮から人物評価を受けたことを根拠とするが、それは異民族討伐における張翼の働きを諸葛亮が称賛したことと思われる。果たしてこれで知識人の間に名声を得たと言い切れるのか。樊建や張翼らの北伐反対を根拠として、姜維輔政期に蜀漢名士社会が姜維・荊州名士・益州名士に分裂したと渡邊氏は述べるが、以上のように彼らの名士たる根拠が曖昧であれば、その結論を導き出すことは難しいだろう。そもそも姜維輔政期に蜀漢名士社会なるものが存在していたのだろうか。姜維の北伐に対して、蜀漢政権内には本書にある諸葛瞻や董厥等の他にも、荊州出身の廖化や荊州名士の楊戲といった数々の反対者がいた。彼らの反対理由は、立身出世や保身、または渡邊氏も述べる益州の保全であったと考えられる。渡邊氏は荊州名士と益州名士を分けるが、両者の間で対立があったという記述は『三国志』に見られず、むしろ蜀書内のこうした反対理由を考慮すると、北伐推進の姜維と北伐反対の人々という、蜀漢政権の内部分裂と考える方が自然ではないだろうか。渡邊氏は名士論を重視するあまり、三国時代の政権や政治動向等全てを名士概念だけで分析しようとしているように思われる。しかし以上見てきたようにそれには限界があるだろう。

本書の大半は『三国政権の構造と「名士」』及び『西晋「儒教國家」と貴族制』

の記述がほぼそのまま載せられている。また末尾の附表についても『三国政権の構造と「名士」』に同じものが見られる。内容の大半がそのままであり、附表の典拠も記されていないのは残念である。

(講談社選書メチエ529、講談社、2012年刊、282ページ)